

藤崎優次郎先生を偲んで



日本豚病研究会名誉会長、藤崎優次郎先生におかれましては、病氣療養中のところ薬石効無く平成24年1月21日(土)ご逝去されました。享年86歳でした。ここに謹んで哀悼の意を表します。

藤崎先生は昭和26年に東京大学農学部獣医学科を卒業された後、同年厚生省国立予防衛生研究所(予研)に入所され、狂犬病、日本脳炎、ジフテリア及び百日せき等のウイルスや細菌感染症の感染と免疫に関する研究に精励されました。昭和36年には一連の仕事により神戸医科大学(現神戸大学医学部)から医学博士号が授与されました。同年、日本獣医畜産大学に助教授として移籍して教鞭をとられるとともに、米国陸軍総合医学研究所顧問として腸内ウイルスや韓国出血熱等の研究にも従事されました。

昭和38年からは農林省(現農林水産省)家畜衛生試験場(家衛試)に奉職され、日本脳炎や豚パルボウイルス病等、豚のウイルス性死流産の防除に関する研究に従事し、わが国の畜産技術の発展及び研究者の育成に尽くされるとともに、研究部長として家畜衛生試験研究の推進に多大な貢献をされました。

家衛試に移られた昭和38年当時、高い死亡率を示す日本脳炎による患者数は毎年1000~2000人に及んでいました。公衆衛生分野では日本脳炎の発生を抑える方法として、コガタアカイエカ等の衛生昆虫の駆除とヒト用不活化ワクチンの接種が励行されていました。その後豚がウイルスの増殖動物であることが示唆されるとともに日本脳炎ウイルスが豚の死流産の原因となることが明らかとなってきたことから、獣医畜産分野でも日本脳炎対策が急務とされました。予研在職中に狂犬病や日本脳炎のウイルスの研究に従事されたことが端緒となり医学の立場からも日本脳炎の流行疫学に着目された先生は、日本脳炎予防用生ワクチンの開発に着手するにあたり、獣医学の専門家からなる「日本脳炎ワクチン小委員会」の委員長として

同ワクチンの安全性基準を設定されました。また、日本脳炎による異常初生豚から分離した強毒株を、牛腎臓培養細胞を用いて、低温で継代することにより安全性基準に適合する日本脳炎生ワクチン S-株の作出に成功されました。本技術によって開発されたワクチンは安全性の高い豚用の日本脳炎生ワクチンの第一号であり、同ワクチンが普及した結果、豚における死流産のみならず、昭和47年以降日本脳炎患者数も激減しました。この「家畜用日本脳炎生ウイルス予防液の開発」研究により、先生は昭和49年に農林省職員功労者表彰（農林大臣賞）を受賞されました。

昭和44～45年に実施された農林省畜産局と全国40道府県の協力を得た豚の死流産の実態調査では、日本脳炎とともに豚パルボウイルス病の発生の実態が疫学的に解明され、両ウイルスがわが国における豚の死流産原因の大半を占めることが明らかとなりました。そこで、先生は豚パルボウイルス強毒株を不活化したワクチンの開発を最初に行い、昭和51年に実用化されて日本脳炎生ワクチンとの併用でわが国の豚死流産発生を減少させました。次いで開発された豚パルボウイルス生ワクチン HT-株を元に作られた生ワクチンは62年から実用化されましたが、昭和43年に英国で初めて発見されたこの新しいウイルスのワクチン開発に成功したのは世界で初めてのことでした。一連の研究（「豚のウイルス性死流産予防用ワクチンの開発」）に対しては平成4年に科学技術功労者表彰（科学技術庁長官賞）が授与されています。

家衛試で製剤研究部長、研究第四部長を歴任された後、昭和61年には社団法人北里研究所に移籍され、附属家畜衛生研究所長、その後名誉所長、理事を歴任されました。

以上の研究功績により平成10年には紫綬褒章を受章されています。

日本豚病研究会は昭和42年頃、家衛試研究員により発足した「豚病問題懇談会」を前身として、昭和57年に設立されました。また、同年には日本豚病研究会報第1号が発行されました。先生は日本豚病研究会の設立に尽力され、その設立にあたっての考え方を会報の中で「最近の豚病の動向から、その解決にあたっては、学際的な観点から疾病を考える必要があるので、その取り組み方について、あるいは新しい技術の研究手法への積極的導入方法についての話題などを取り上げてはどうかと思っている。」と書かれています。先生は初代会長として平成15年に退任され、名誉会長になられるまで21年間にわたって会の発展に奮闘されました。本年は日本豚病研究会創立30周年の節目の年に当たりますが、会員数は約900名を数えるまでに至っております。平成4年には先生からご寄付いただいた基金を元に「日本豚病研究会藤崎優次郎賞」が創設され、現在に至るまで17回、のべ24人の方々が受賞されております。

私が昭和55年に家衛試に入省した時の研究第二部長が藤崎先生でした。時間を守って、効率よく、スマートに仕事をしろという、厳しい当時の部長は新人にとっては近寄りがたい存在でしたが、根っからの江戸っ子気質で、夕方になって酒が入れば部長自身も若い時には凡そスマートとは呼べないような仕事をしていたことを話されるなど、現実を見ながら常に理想を追い求める研究者の姿勢を教えられたような気がしました。先生はお酒が好きで、酒の席では「ホイッとやれば、ハッと効くようなワクチンは出来んのか?」とか、「パッと見れば、ハッとわかる診断はないか?」といった話題を使ったブレインストーミングで酔いが回っていた思い出があります。常に颯爽とした先生の周りには多くの研究者や研修生が集まっていたが、それは研究に対する先生の姿勢や考え方を少しでも吸収したいという表れだったように思いますし、その教えは後進にも間違いなく受け継がれていることでしょう。最後になりますが、長年にわたり暖かいご指導をいただいた藤崎優次郎先生に感謝するとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

平成24年6月20日

日本豚病研究会会長

津田知幸